報告書名：自立高齢者の口腔の健康とWHO/QOLの関係および口腔ケア介入によるQOLへの貢献

研究者名：藤本篤士[1)]、武井典子[2)]、大橋一友[3)]、岩久正明[4)]
所　　属：[1)]医療法人渓仁会西円山病院歯科診療部、[2)]財)ライオン歯科衛生研究所、
[3)]大阪大学大学院医学系研究科、[4)]日本歯科大学

【目的】

近年、歯の欠損や歯周病による症状は慢性的に継続・進行し、それにより、もたらされる障害は食事の楽しみ・会話や表出の豊かさなどのQOLに深くかかわっていると考えられている。また、生活者のQOLの向上は、健康教育や口腔ケアの最終目標に位置づけられているが、認識できても的確に定義することの困難な概念であるため、曖昧に表現されているのが現状である。さらに、口腔ケアは、高齢者のQOLを向上すると言われているが、包括的なQOL評価スケールを活用して確かめられていない。そこで今回、包括的なQOL評価スケールである「WHO/QOL調査」を活用して、

(1)歯科健診および質問紙調査により**口腔の健康とWHO/QOLの関係**を明らかにすることが可能か検討する。

(2)歯科健診結果に基づく継続的な口腔ケア支援を行なった後に同様の調査を実施することにより**継続的な口腔ケアがWHO/QOLの向上に貢献できるか**を明らかにすることが可能か検討する。

(3)**WHO/QOL の変化を最も的確に評価することのできる調査項目・方法の確立を検討する**ことを目的に調査を行なった。

【対象および方法】

札幌市西円山病院のケアハウス入所者56名を対象に、「WHO/QOL」と「口腔の健康に関する質問紙」および歯科健診を実施した。歯科健診は、歯・歯肉・粘膜・顎関節の状態、義歯の有無、口腔清掃状態、舌苔、口臭、カンジダおよび唾液湿潤度検査を行なった。1ヶ月後に個々人の口腔状態に合わせた口腔ケアプランの説明書を作成・説明した。口腔ケアプラン提案3ヵ月後に初回調査と同様のQOL調査、口腔の健康に関する質問紙調査、歯科健診、カンジダ検査、唾液湿潤度検査を行った。

【結果および考察】

(1)初回調査の口腔の健康とWHO/QOLとの関連性では、「食事がおいしく食べられること」とQOLとの相関が認められた。

(2)3ヶ月間の口腔ケアにより、初回にカンジダが多数検出された高齢者ではその数が減少し、唾液湿潤度が少なかった高齢者はその増加が認められたが、WHO/QOLの変化は示されなかった。

(3)本調査は、一般に用いられる疾病中心のQOL指標ではなく、包括的な指標を活用した新しい試みであった。高齢者のQOLと口腔ケアの関連性を明らかにするためには、今回をその予備的調査として、今後さらに調査項目の追加・分析により客観的な調査の方法論を確立することが課題である。